

地域と学校 その14

石小にビオトープは必要?

小松 尚 (名古屋大学大学院環境学研究科准教授)

6月末の土曜日、石小は授業参観日でした。朝の1時間目でしたが、ざっと数えると7割くらいの出席率でした。ふと下の階に目をやると、お父さんやお母さんが図書室で就学前の子どもと本を読んでいます。一方が子どもの授業の様子を見ている間、子守をしていたのでしょう。託児や学童保育の場所として、この図書室や地域ゾーンが使えるのではないかと思わせる光景でした。授業参観終了後は、登下校時に困ったら助けを求めて駆け込める「子どもを守る家」を確認しながら、親子で帰宅しました。さて今回は、4年目に入った建設委員会での屋外環境整備に関する議論の様子です。

早くも4年目の建設委員会

正月明けの新校舎の地域祝賀会で始まった2005年ですが、4月になって、建設委員会も4年目に入りました。34名の委員のうち、11名が入れ替わりました。教頭先生も交代し、女性のKt先生がメンバーに加わりました。また、教育委員会のメンバーも交代し、Taさんが加入しましたが、TaさんはKt先生の教え子でした。

2005年の年末には、前号(その13)でご紹介したとおり、旧校舎が解体されます。そして、翌年の3月には体育館とプールが竣工します。そうすると、運動場と以前の校舎や体育館があった場所をどうするかが今年度の検討課題です。2005年度の初回の建設委員会(第37回)でも、「校舎同様、屋外環境の計画もみんなで意見を出し合って進めましょう」と、委員長Otさんが挨拶されました。

屋外環境は、校舎が建った後の隙間ではなく、学校や子どもたちの生活にとって大事な空間であるのは言うまでもありませんが、特に石榑小学校の新しい校舎は、一般の校舎と違って表と裏がなく、周囲が開放的ですので、校舎以上に地域との関係は重要なテーマです。

また、すでにこれまでの建設委員会で、「昔からの門柱を残したい」とか、「北側の桜は思い出の木なので、道路幅は考え直せないか」、「木造校舎の礎石だった石積みを大事にしたい」という意見が出ています。地域と学校の大事な記憶の数々をどう継承し、活かすのか。この1年の議論の焦点になるのは明らかでした。



「くつろぎの間」での建設委員会
新しいメンバーとともに、初めて新校舎の畳の間で建設委員会を行いました。
(石本建築事務所提供)

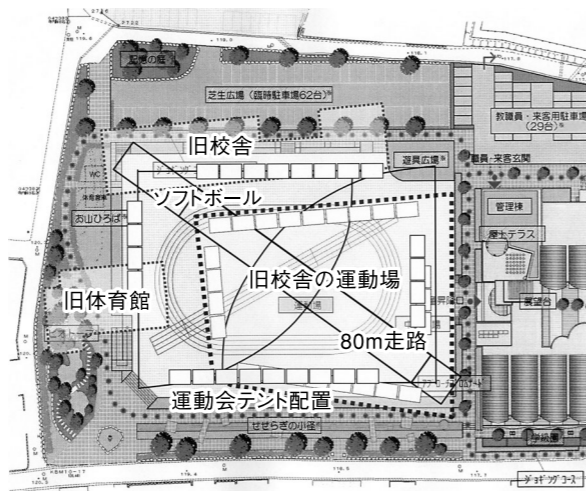
ビオトープは必要?

第38回建設委員会では、想いを語り合いました。

地域のメンバーからは、「昆虫や動物などと年中触れあえる、自然学習の場が欲しい」「使っていない井戸を再利用して水辺をつくる」「もっと遊具があったら」などなど。「山から吹き下りる風による砂塵対策が必要」という意見もありました。学校としては、これまで運動場が狭くて取れなかった80mの徒競走ができる110mの直線走路を確保して、運動会で思いっきり走らせたいという考えがありました。

この時点で既に意見が分かれたのは、ビオトープについてでした。ビオトープとはドイツ語で「生き物の棲む場所」のこと。水辺をつくり、そこで虫や魚、植物が棲めるような場所を学校の校庭や屋上につくることが、都会の学校では最近行われています。

そういう情報は建設委員の耳に入っていますので、「石小でもつくりたい」という複数の声があがりました。石小でも使っていない井戸や周りの農業用水をもらって、子どもたちが学校の授業や遊びの中で活用できないかと。しかし、これには「都会の学校じゃないからいらないよ」という反対意見や「もしつくるとしても、子どもたちにつくらせたい」という意見も。私も率直に言うと、学校の周囲の用水路では蛍が飛び交う環境なのに、どうしてビオトープなのか?と思いました。



新旧の運動場の比較
新しい運動場は一回り広くなるのがわかります。
(石本建築事務所提供)

ビオトープで激論!

第39回建設委員会では、前回の意見交換を整理し、①グラウンドやお山広場など活発な活動を支える、②自然との触れあいを育む場所をつくる、③散策路など地域住民も使える憩いと交流の場にする、④縁のある樹木等を保存して思い出を伝承する、の4点がこれからの議論のテーマとしてまとめられ、これから一つずつ議論を深め、具体化しようということになりました。

この回でも、ビオトープは議論的になりました。ビオトープについては、前述のテーマの②に含められているのですが、今回も「自然豊かな石榑にはいらない」という意見と「以前の石榑とは自然環境が違うので学校にあるのがいい」という2つの意見に分かれました。私も、前者の意見に頷いていましたが、後者の意見に賛成の方々が言う理由には、川や山は昔と違って危ない場所になったという点もありました。

この議論は次回(第40回)も続きました。ある委員は、自らビオトープの事例を訪問し、「管理費が相当かかると聞いた」と結果報告してくれました。また、「用水路から水をもらうのは水利権があって無理だよ」「校外へ出なければいいじゃないか」と、反対意見が少し優勢になってきました。

学校の先生方はこの議論をどう聞いていたのでしょうか。教頭先生からは「子どもがリシャバシヤと遊べる水辺はほしい」「でもビオトープを管理できるか、活用できるかは不安がある」との返答。また、ビオトープだけでなく、「教材を求めて地域に出て行かないといけないとは思っている」とのこと。

なんとなく、一言コメントをという視線を感じたので、私も一言意見を述べました。それは、遊べる水辺をつくることから始めたらどうか、ビオトープも今後本当に欲しければその時につくってはどうか、と。問題先送りの考え方ですが、何でも全部最初につくってしまうというも変な話だと思ったのです。つくるなら今回の工事予算でつくってしまうという考えも頭をよぎりますが、100年かけて少しずつやってきたのが、この石榑です。もちろん、ビオトープは不要という気持ちが私もあったのですが、とはいえ、この数回の議論でそれを明確に決着させる必要もないと感じたのです。

結論としては、井戸を活用した小さなせせらぎは、子どもの水の遊び場としてつくろうということになりました。



校舎の北側を流れる農業用水路
この時期には夜、蛍が飛び交っています。

遠くの住民は利用できない?

第41回の委員会では、憩いや交流ができる屋外環境をどう考えるかについて、議論しました。この時に、今年度から委員になった方から、「居住地によって学校までの距離に差がある。学校から遠い高齢者は来訪上のハンディがあるが、どう考えるのか」という意見が投げかけられました。正直、この時点でこういう意見が出てきたのには面食らいました。しかし、これまでの計画の経緯を外から見ている人の目にはそう映っていたのかと、認識を改める機会にもなりました。石榑は、学区が広く、地区によっては小1時間歩いて学校に通っている子どももいると聞きます。また、大人の移動は車中心ですから、交通弱者となりやすい高齢者の方と学校の接点をどうつくるかは、屋外環境のみならず、運営面においても重要なテーマになりそうだと、この時感じました。

この投げかけに、「高齢者は全体に増えているから、考慮すべき」「いや、地域開放が重要なテーマではあるが、子どもを中心に考えるべきだ」といった意見が飛び交いました。さらに話は広がって、「子どもが卒業すると学校と疎遠になってさびしい」「中学生になってもよく学校に立ち寄っている。そういう場所が必要」と、小学校への地域の思いを語る人がいました。

記念写真をどこで撮る?

また、この間、ある建設委員が地域の方から「新校舎になって校門がよくわからない。どこで記念写真を撮っているの?」という質問を受けたそうです。確かに周囲に対して開放的で、これという正門や校舎の正面もありません。

そういう地域の声を受けてかどうかはわかりませんが、建設委員のIsさんが旧体育館の跡地に大きなシイの木を植えてはどうかと、パソコンで合成写真をつくって提案してくれました。写真の見事な出来映えに一同感心して見入っていました。残念ながら採用には至らなかったのですが、私はその合成写真を見て、旧校舎や旧体育館がなくなると西の山々がこんなに見渡せるようになるということも、初めて認識したのでした。



旧校舎の頃(上)とシイの木を植えた場合のシミュレーション(下)
藤原岳や竜ヶ岳を見渡す風景がよみがえります。
(「第41回わーくしょっぷだより」から)